

とうきょう すぐわくプログラム実践報告書(八王子市)

施設名	高尾保育園
-----	-------

1. 活動のテーマ

＜テーマ＞

いきもの

＜テーマの設定理由＞

- ・現在、異年齢クラスでカブトムシを飼育している。子どもたちが積極的にエサの交換を行い、カブトムシに触れ、観察を楽しんでいるため。
- ・カブトムシを飼育する中で「夜行性って何?」「うんちした! 茶色い!」「卵を産んだ。どうすれば幼虫になるかな?」など、興味関心を示しているため。
- ・カブトムシだけでなく、昆虫とは何か? またはいきもの(昆虫以外)とは何か? 虫やいきものの生体について子どもたちの興味関心を深められるようにしていくため。

2. 活動スケジュール

- ・高尾地域を散策し、身近な虫・いきものを発見・採集・飼育する。園外散歩に出かけ、自然に触れることで生き物に興味をもつ(6~3月)
- ・カブトムシの飼育・観察。卵を孵化させ成長する過程を観察する(6月~9月)
- ・素材を組み合わせて釣り道具を作り、川で釣りをする(12月)
- ・川でカエルの卵を採取(2月)
- ・職員会議にてスケジュール確認・活動報告(11月・12月・1月・2月)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材】

- ・落ちている木の枝、たこ糸、毛糸、クリップ、つまようじ、ヨーグルトのカップ、プラスチック棒、虫メガネ、虫かご、めだかの餌、ガムテープ、ルーペ 等

【環境設定】

- ・いきものの生態を知るために書籍、生き物を採集・飼育するための虫取り網や飼育ケースの購入。
- ・日常的に園外散歩に出て、その季節の自然に触れる機会を作る。散歩で収集したいきものを飼育できるよう、園内に観察ケースを設置した。
- ・飼育しているいきものに触れたり、興味をもったものを探求し自分で調べたりすることができるよう、図鑑や絵本を保育室の本棚に加えた。

4. 探究活動の実践＜活動の内容＞

- ・昨年度飼育していたカブトムシが卵を産み、幼虫に育った。初夏に蛹から成虫へと変態する様子を観察し、飼育する。
- ・カブトムシ以外のいきものにも興味をもったので、積極的に戸外へ出て自然と触れ合う。
- ・冬期、バッタやちょうちょ等、草むらにいたいきものが少ないと気が付く。川には魚がいることに気が付き、手作りの竿を作りて釣りをして捕まえようとする。
- ・川には魚以外にもいきものがいることに気が付く。オタマジャクシを捕まえ、飼育する。
- ・活動を実施した際は、担任同士が振り返りをし、どの職員でも活動を継続的に行えるようにする。また、保護者に対しては、園の掲示用のホワイトボードを使用し、活動の様子や子どもの発言等、こんな気づきやこんな発見があったことを細かく書いて知らせていくとともに、定期的に配信するクラス便りの中で、活動内容を掲示するようにした。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

2024.6

- ・散歩に出かけ、カマキリ、バッタ、テントウムシ、ダンゴムシなど、たくさんの虫を捕まえ、観察する。
- ・前年度飼育していた幼虫が蛹になり、成虫となって土から出てきた。子どもたちは喜び、手に取ろうとする。昆虫ゼリーをあげたり、飼育マットに霧吹きで水をかけたりして世話ををする。
- ・子どもたちが園庭の花壇の土を掘っていると、幼虫をみつけた。虫眼鏡でじっくり観察した。



2024.7

- ・カブトムシを飼育する。体に毛が生えていること、オスは元気に動き回るがメスは土に潜ってばかりいることに気が付く。「夜行性なのかな？」という疑問もあり、図鑑を保育者と見て調べる。
- ・元気のないカブトムシを見て、「死んじゃったかな？…動いたかも！？」「元気になるように、もう少しゼリーの近くに置いておいてあげよう」と予測を立てて、世話をしようとする。
- ・テーブルの上にいたカブトムシがうんちをすると、「茶色い！」「うわあ、きもい！」「あんまり臭くないね。」等、感想を伝え合っている。保育者が「人間もご飯を食べたらうんちするよね。それと同じだね。」と伝えると、「確かにそうだね。」と大騒ぎしながら、人間とカブトムシの共通項を見出そうとしている。
- ・死んでしまったカブトムシを見て、「ケンカしちゃったから、死んじゃったのかな。」「こっち、治る？」と、心配そうに覗いている。保育者が「いきものが死んでしまったら、もう動かないね。寂しいけどお別れだね。」と伝え、子どもたちと一緒に園庭の隅にお墓を作り、手を合わせる。

2024.8

・飼育していたカブトムシが産卵し、小さい幼虫が孵化する。しかし、大きくなる前に幼虫が死んでしまう。「動かないね。」「色が変わっちゃったね。」など、幼虫の変化に気が付く。

・園庭でカマキリを捕まえ、観察ケースに入れた。「餌をあげたいから、草が生えている畑に行きたい。きっと、餌のバッタがいるよ。」との声が上がる。バッタを捕まえ、カマキリの虫かごに入れると、実際にカマキリがバッタを捕食した。お腹一杯になったカマキリを、狭い観察ケースから広い机の上に出し、「運動させてお腹すかせよう。」「そしたら、またバッタを食べてくれるよね。」と、子どもたち同士で会話をしている。

2024.12

・園外へ散歩に出ると、バッタやカマキリは見当たらないことに気が付く。「生き物は、どこに行ってしまったんだろうね?」との保育者の問いかけに、「土や枯葉の下に何かいるかな?」と探したり、「水の中にはいるかも?」と、近くの川を覗いたりする。すると、小さな小魚や川エビ、ヤゴを発見する。「捕まえたい!」「どうやって?」「網はないもんね。」「じゃあ、釣りしようよ!」と、話が進む。

・山から枝を取ってきて、「これを釣り竿にしよう!」と保育者が提案する。園から、毛糸やハサミ、ガムテープを持って行ったので、それらを組み合わせて現地で釣り竿を製作する。毛糸を川に垂らしてみるが、魚は釣れない。「魚は、すばしっこいからできるだけ魚がいるところまで近づきたいな。もっと奥の方まで行きたいから石を運んで橋を作ろう!」「餌がないから釣れないんじゃない?先生、餌になるものを一緒に探そう!エビとかいたよね。それが餌になるんじゃない?」と、子どもたちの中からアイデアが湧き出てくる。

・餌になるような生き物を川で見つけようとするが、なかなか見つからない。時間をかけて見つけた幼虫やヤゴを毛糸に結びつけようとするが、うまくいかない。10分ほどかけて結べたとしても、川の流れで餌が流れてしまう。「そこにある葉っぱを餌にしたらどうかな?」と、近くに生えている雑草を括り付けてみるが、魚は寄ってこない。葉っぱは簡単に手に入るが、魚は寄って来ないことを知り、「やっぱり、魚を釣るには生きものを餌にしないとダメなのか…?」という考察が行われる。

・餌を糸に結びつけるのが難しいことを知った子どもたち。釣りに行ったことがある子が、「お父さんが針に餌を付けてた気がする。」と発言。保育者が「保育園に釣り針はないね。何か代わりになりそうなものがあるかな?」と聞くと、「ホチキスの針とか、爪楊枝とか?」との声が上がる。「クリップを伸ばして使うのもいいかもね。」と新たな案を保育者が提示すると、「じゃあ、色んな針を試してみよう!」と子どもたちのやる気が上がる。

・実際に、色んな材料の手作り釣り針を試したところ、「木で作られた爪楊枝は浮いて魚まで届かないけど、クリップは沈むね。」と、素材の性質の違いを実体験から学び取る子がいる。

・魚は1匹も釣ることができなかつたが、試行錯誤する楽しさは共有できていた。



2025.2

・川のそばにあった大きな水たまりに、カエルの卵があることを知った子どもたち。「卵を見てみたい！」「釣りをしたら卵を取れるかも？」「早く行きたい！」と、子どもたちの声が聞かれる。朝の会で、「カエルの卵って、どんな形？」「どんな色？大きさはどれくらいなの？」との声が上がる。保育者が、「図鑑で見てみればわかるかもしれないね。調べてから川に行こうよ。」と提案し、図鑑で確認してから屋外へ出る。



・川へ行くと、たくさんの卵があった。おたまじやくしも泳いでおり、手で捕まえる子もいた。手にした子は、「ぬめぬめしているから、ヌメジャクシだね！保育園に持って帰ろう。」と嬉しそうにしている。一方、「手で触りたくないな…。」「じゃあ、釣りをしよう。」と、以前作った釣り竿を垂らしてみるが、捕獲することはできない。「無理かあ。ほら、釣れないよ。」とがっかりしている子どもたちに、保育者が空き容器と枝を提示すると、柄杓のようにテープでくっつけ、卵やオタマジャクシをくくうことができた。



5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

- ・残念ながら、飼育していたいきものが死んでしまうと子どもたちは悲しい思いになることもあった。「なんで死んでしまったのだろう?」と思いを巡らせる中で、「色々な理由で命を終えることがある。」「いきものを手に取って観察していたが、長時間触ってしまったからかもしれない。」「飼育環境が合わなかったかもしれない。」など、様々なことに気が付いた。『大切なのはいきものを大切に育てる事。そのいきものが生息している自然環境に近い環境を作つてあげること』を保育者が子どもたちに伝えた。いきものについて学ぶ良い機会となり、次は大切にいきものを扱おうとする意欲につながった。
- ・活動の中でうまくいかなかったときは、どうすればうまくいくか、帰園後に図鑑を見たり、集会等で子どもの気づきや意見を拾い上げ、フィードバックしたりすることで、次の活動で工夫して取り組めるような環境を整えた。考察するような場面も見られ、子どもたちの成長を感じた。
- また、現場には子どものしたいことやひらめきに対応できるよう、必要そうな廃材や道具が入った活動用のバッグを持って行き、活動を発展させられるようにした。その中で、友だちの良いところに気づいて言葉で伝え合い、できることを教え合う中で、次第に自信がつき、「楽しい、またやりたい」という意欲や探求心が高まった。異年齢保育をしているため、上の学年の子が工夫している姿を見て、自然と下の学年の子も興味をそそられていた場面がたくさん見られた。
- ・子どもたちのいきものへの探究心を高めるためには、日頃の保育の中で見られる子どものつぶやきや発見を逃さず、様子や反応をより丁寧に見て共感したり、次の環境設定を考えたりして、今後の保育を展開していくことが大切だと気付けた。